

# 沼津の暮らしラボ

## 第2回「デザイン×公共」

日 時：令和3年10月25日 17:30 - 19:30

場 所：沼津ラクーン6階

メンバー：

座 長：青木純（沼津市リノベーションまちづくりアドバイザー、(株)まめくらし 代表取締役）

学 識：出村嘉史（岐阜大学工学部社会システム経営学環 教授）

専門家：加藤寛之（都市計画家、(株)サルトコラボレイティヴ 代表取締役）

ゲスト：名畑恵（NPO 法人まちの縁側育くみ隊 代表理事）

パネリスト：西島由紀子（キナリ舎 代表）

オブザーバー：会場に来てくださった方々

### 1. 「沼津市リノベーションまちづくりの現状について」

（沼津市まちづくり政策課 渡邊主査）

### 2. 講演「多様な暮らしの創造『デザイン×公共』」（名畑恵氏）

○座長青木氏からの挨拶

・今は何でも効率的にこなせる時代になってきて、例えば買い物するにもネットで出来たりするが、非効率なものが失われていくというのは、いろんな余白が奪われていくということ。買い物するのにもまちなかで買い物をした場合、目的以上のことが出来たりしていた。会話の中で当初予定していなかったものを買うことが出来たり、何も買わなくても満たされる時間であったりなど、今はそのようなものが失われている。関係性とかいろんなプロセスとかを改めてデザインしていこうということ。素敵なものが素晴らしいわけではない。一見めんどくさそうな手間暇とか、いろんな、そこに生まれるその関係性・デザインをもう一回考えてみる時間です。

○ゲスト名畑氏による講演「豊かな暮らしの創造『デザイン×公共』」

○地域プレイヤー西島氏講演

### 3. フリーディスカッション

青木氏）二人ともエリアマネジメントの話であり、私も加藤氏もエリアマネジメン

トをずっとやってきているが、すごくうなずいた瞬間があって、「エリアマネジメントとは、どうにかこうにかすること」、これに尽きる。最初からそう思っていましたか？

名畑氏) そうは思っていない。エリアマネジメントも何もわからず始めている。

青木氏) 西島さんは、団地内でどうにかこうにかしている。自分たちのために自分たちでできることを続ける。デザイン×公共というテーマのデザインという言葉の中に込められたものは、文字通りのデザイナーがデザインするものばかりではなく、デザインの中に込められた思いは人それぞれでたくさんあると思う。初めに目的とゴールを定めたということも、デザインであり、目的のデザイン、ゴールのデザイン、何を成し遂げるかのデザイン。そして、幸せに暮らすことと不測の事態に対応するためにという言葉が出ていた。

名畑氏) 今、錦2丁目では再開発事業が計画されていて、350戸のマンション計画がある。この地域には今430人しか住んでおらず、350戸ができると人口が一気に3倍近くになる。人口構造が激変する。これから住む人たちが、どう新しい暮らしをつくっていくかが課題となっている。西島さんの話を錦2丁目で話してもらいたい。

自分たちの子供たちとこの地域でどう幸せに暮らすかというのは基本。

青木氏) まずは自分たちの家族が幸せに暮らすから始まっている。地域とのつながりが出来ていると不測の事態にも対応できる。オランダかどこかにあるすごく治安が悪い場所にある団地があり、それが変わることで地域が劇的に治安が良くなった事例がある。バルコニーに日常的に写真が飾ってある。ここに暮らしている人たちはこういう人たちですよという、とびきりの笑顔の写真。誰が住んでいるかわかるから話しかけやすくてつながりが生まれた。オープンにすることで、地域との関わりも生まれて、自分も幸せになり、結果その地域が安全安心な場所になった。

高齢者ということをはとくくりにして、高齢化と聞くとぐっと身構えてしまうが、高齢者にもさまざまいろいろな人がいる。前回の首藤さんの話でもあったが、その人の得意なことを掘り下げると、とても活躍する人もたくさんいる。そういう状況をつくってみると面白いかも。

西島氏) 団地にお住まいの方は、昔先生をやっていた方やこだわりがある人が多い気がしている。

出村氏) 成り行き任せ＝経済合理性が、確かになと思った。その対極にあると表現されたのが人間。二人がやっているのが、ビルとか都市とかモノではなくて、人間相手にしているなというのが共通しているし、大事な本質的だなと聞いていた。

まちの面白さはそこで出会う人だと思っている。まちのなかに、アーバンビレッジのようなものがあって、その中の人たちが一人一人顔を見せあってつながりあってる、まさしく団地でもそうだと思う。私も団地育ちであり、隣はわかるが、4軒くらい隣はわからない。それが普通で、それが経済合理性である。人と触れ合いたくないから、そういうところに住んだという大きな歴史がある。まちのなかのみんな人懐っこい人たちに囲まれて窮屈だと思う人たちが、干渉のないところに住もうという人の集まりが団地なのではないかと、子供ながら思っていた。その中で、無理して子ども会などをつくったりしている。子ども会とは組織である。個人と個人がつながりあう場ではない。いろいろな活動をやるが、なにか自発的なものではなく、長いものには巻かれるや、義務を果たすや、礼儀正しくするなど、そういうことばかりが重要視されてしまっている。それに対して、先ほどのマルシェの、参加している人たちの顔を見ると、ちょっと違う生き方をしているかなって思う。むしろ対極にあるめんどくさいことをやっている。めんどくさいがって団地に集まって収まってきたということと対極にあるめんどくさいことを団地で始めているという現象が起きている。

西島氏) 大岡団地は、1棟16戸しかなく、毎月みんなで庭掃除をするというローカルな習慣があり、顔見知りである。この前も、いつも参加しているおじいちゃんがいなかった時には、息子の家に聞きに行ったり電話をしたりして、結局は寝ていただけだったけど、近すぎず遠すぎずという近所付き合いが出来ていると思う。

加藤氏) 出村さんが言ったように、めんどくさいことをめんどくさく感じさせないようにすることが、デザイン×公共なのかなと思った。課題に対して動くのは、それに対して埋もれてしまって、自分は好きではない。どちらかという、自分が楽しいとか素敵だなというものを尖らせていくほうが好きであり、そうすると自分の話になるし、結果的にめんどくさいことも解決していたりする。そういうほうがすごい素直。

人とつながることは、はっきりいってめんどくさいことだからこそ、都市機能として団地が出来たと思う。でも、それではだめだよなって気付いた我々は、これめんどくさいから頑張ろうではなくて、めんどくさくならない仕組みをつくる。おじいちゃんたちにいろいろ言うとめんどくさくなるけど、裏で遺影を取られているって思っているとくすっときて、コミュニケーションが生まれる。コミュニケーションを普通にしたらめんどくさいが、そういうことをするとコミュニケーションを取りやすくなる。

青木氏) 前回の首藤さんの話とつながってきたけど、最後、死生観とか死に行くと

きは誰もが不安である。だけど、その不安がすごく楽しい未来だったら少し変わっていくとか生きているうちに生き生きしてられる。

そして、一つの区割りであるまち単位の話も団地の話も、そこで最終的に幸せにあの世に行けるならば、例えば一人しかいない、身内がいないなど、これからどんどん高齢化で増えていき、周囲に関わりのある人がいないが、ここに住んでいるとみんながまちぐるみで自分を送り出してくれるなら不安じゃない。

加藤氏) それが幸せかもしれない。

青木氏) まちで結婚式や葬式をやっている風景は幸せ。新しくなった新仲見世商店街で、結婚式や葬式もいいかもしれない。なおらいなど、まちの飲食店でできるとみんなにもビジネスチャンスになる。公共の場所は、一人一人のものではなく、結果、みんなが合わさるといふか、自分たちの結集でみんなが生まれて、結果みんなが潤う形になるのは最高のこと。

加藤氏) さきほどの350戸増える話だが、岐阜の柳ヶ瀬のマンションもそうだが、ほとんどまちと関わりをもたない人たちが住む。そういう人たちに悔しいと思わせるほどいいところをつくれるといいと思っている。まちと関わっているほうが楽しいし、そういう生き方のほうがカッコいいじゃんというのを見せていきたい。そう思わせたら勝ち。

青木氏) 会所という言葉がとてもよかった。沼津中央公園や週末の沼津、ワタライクリーニングもある意味会所ではないか。

渡会氏) 勉強になりました。

青木氏) ワタライクリーニングも開き始めて、最近変わってきていると思うが、どんな日常が生まれているのか？

渡会氏) 近所のおばあちゃんたちがぬまつ一みてるよとか、子供たちがヒット打ったよと言ったりとか、いろんな人や話が集まってきている。

青木氏) 場所をつくと関わりしろができるということ。人が集まる場になり、公共であり、ある意味会所である。

青木氏) 沼津は多様な年代が集まる。とても大事なことで、普通は、若者だけや、男性だけなど、よく排他性が生まれてしまっているが、ここには多様性が生まれている。

まちの重鎮や長老がわきを固めているという話をしていたが、名畑さんのところはどのような状況なのか？

名畑氏) 皆さん丁稚奉公を受け入れた経験があり、他所で修行してきてまちに帰ってきているので、若い人を応援する空気があるのかもしれないと思っている。ま

た、共感を求めすぎない関係のほうが、長続きするのかなと思う。言いたいこと言えるけど長続きできるというほうが大事かなと思っている。

出村氏) 組織を越えてつながりあうのは個人個人しかないと思っている。まちのなかで激論はなかなかできない。それをできる間柄をつくったのが最大の功績では？

名畑氏) 勉強会など、オープンに学びあう会は、年に5-6回ある。毎回参加を強要していない。外からの人と中の人をセットで話をする場を設けているからだと思う。

西島氏) 中の人をもっと知ってもらおうということが大事ということが、よりいいものがつくれると感じた。

名畑氏) 知ることはとても大事だと感じた。

青木氏) デザイン×公共というのは、生態系だと思った。みんならしさを取り戻すや、会所などの話もあったが、目指すべき目的、プロセス、関係性などの要素を組み合わせることで常に生態系になり続ける。大事にしたいものは変えないけど、常に変化に対応し続けるとか、参加し続ける人も変化し続けてもいいし、関わりも変化し続けてもいい。沼津のリノベーションまちづくりの6年の取り組みを続けるために、この場があるし、生態系であることが、自然に続いていくこと。その状態をつくり続けることがデザイン×公共なのかなと思った。公共というものに対して、自分たちの目的で関わり続けて、沼津のまちの公共がより豊かになり続けるといいと思う。